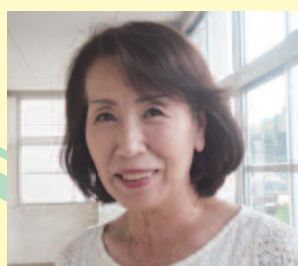




社協だより 萩

2014
8/1

Vol. 57



縁 えにし

昨年7月28日の山口・島根豪雨災害により、萩市東部地域に甚大な被害がありました。早期復旧に向け、7月31日から1か月間萩市災害ボランティアセンターを開設しました。

災害直後からのご近所の縁、全国から集まったボランティアと被災された方との縁、ボランティアとボランティアとの縁。人と人を結びつける不思議な力、縁は無限のつながりです。災害により無くしたものは大きかったけれど、ご縁をいただくことができました。



8月25日 夏の思い出「縁日」開催
8月31日 萩市災害ボランティアセンター閉所
ボランティア数 7324人
ニーズ件数 495件

道路寸断…

小川13区 齋藤 光雄



江崎から弥富地域を結ぶ幹線道路が水害で陥没、土砂流入により、車両での通行が困難なところが多くなりました。

私の小川13区集落でも、直接の水害はありませんが、斜面の土砂が崩れ、道路が寸断し孤立しました。

災害の翌日には、幹線道路が不通のため、唯一の迂回路である13区集落へ多くの車両が入ってきましたが、通行ができない状況で、2km以上にわたる大渋滞となりました。こ

の光景を誰が予想できたでしょうか。

私と集落の消防団員が、近所の方が所有するショベルカーを借りて、道路をふさいだ土砂を撤去しました。

次々と渋滞車両が通行する中で、「ありがとう」との声かけに、嬉しさと、地域でできる助け合い活動を改めて認識することができました。

地域のちから

弥富5区 長尾 富子



地域を結ぶ主要道路が全て通行止めとなり、孤立事態が発生し、

私の集落でも住宅被害は2戸ありました。放牧牛4頭は食糧が無くなり、引き上げるという最悪な状況になりました。

そんな中、法人会員で集落内の被害状況調査をし、地域住民は被災家屋の復旧作業に家財の搬出やユニボ2台で土砂除去に携わり、女性部は昼食の炊き出しのほか、機械が入らないところの水路は手作業で行いました。そうして、ようやく水を通すことができたのです。

このたびの災害で私を感じたことは、組織ができていたので、作業対

応もスムーズに進んだと思います。そして、作業でつないだ住民の輪、絆もより一層深まったような気がします。命の大切さを改めて感じました。

これからも「集落の農地は集落で守ること」を基本理念として、「できる人ができる時にできること」をモットーに、誰もが住みやすい地域作りのお手伝いをしていきたいと思っています。

地域での災害ボランティア

吉部広瀬上 末成香奈江

我が家は、蔵目喜川沿いに建っています。溢れそうな水の量と目の前で折れて流れていく大きな木を見て怖くなり避難しました。幸い我が家は無事でしたが、地域内のいたる所で被害が出ました。

むつみでは、地域でのボランティアを募集されていたので、私もすぐに参加しました。どちらのお宅も重機が入れず、手作業での泥出しでした。多くの人が集まり、参加者全員が声をかけ合い、地域の気安さもあり、暑い中での作業でしたが辛さはなく、思いのほか早く進み、人数と道具がそろっていることがとても大切だと思いました。

被災された方は、心身ともに疲れ

ているにもかかわらず、一緒に作業してくださったり、涙ながらにお礼を言われたり、高齢で作業ができないからと差し入れをされた方、お気持ちを考えて、本当に胸が痛みました。

作業に参加してみて、地域住民の助け合いの心や思いやりの心が失われていないことへの感動もありました。このような災害が二度と起こらないことを切に願います。



7月28日の出来事

高俣後井 長田 祐二

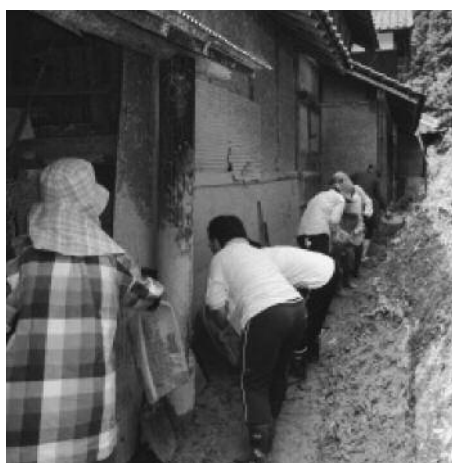
今までの中で一番恐ろしい出来事でした。妻から「お父さん、家が大変。裏山が崩れた」との連絡を受け、役場に避難している家族と会いました。

雨も止み自宅に戻ると、呆然とし

ました。自宅の片付けを始めましたが、何をどうして良いか分からない状態で途方に暮れる毎日が続き、家族も限界でした。

その時、家の前にたくさん車が止まり、一輪車やスコップを持った方が来られました。「ボランティア」の方々です。地域の方や小学生、萩市の方などたくさんの方に来ていただきました。ボランティアの方には、本当に勇気をいただきました。私たち家族のために笑顔いっぱい作業をしてくださり、家族も次第に日々笑顔を取り戻し、元気をいただきました。

今回のことでボランティアの大切さが初めてわかりました。一日も早い復旧を願い、ボランティアをしてくださった方、ご心配してくださった方に心からお礼を申し上げたいと思います。



ボランティアに支えられて

江崎上本郷 中嶋 諄



水害の状況を聞かれるたびにボランティアの話が欠くことはできません。

あの日、堤防を越した水が田圃の中より泥水となってどろどろと住宅を襲い畳を押し上げ、全ての物が水の中となりました。水の去った後、最も困ったことは、床下のヘドロの始末でした。社協さんのお世話でボランティアの派遣をお願いしました。狭い床下もいわず泥まみれになりながら、汚泥を袋に入れ屋外に運び出しましたが、さぞ重たくて疲労も多かったことと思います。

地区の各家庭もお世話になり、また道路側溝も長年掃除困難でしたが、炎天下にもかかわらず、重い溝蓋を持ち上げ、土砂を完全に除去し清掃していただきました。

この活動が復旧作業の大きな助けとなり、精神的にも被災者の力となることを身にかけて感じました。

おかげで、地区全体が元の状態に近づいております。ボランティアの方をはじめ、関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

災害ボランティアに参加して

須佐山根丁東 大谷 浄二

私は、地域が大変な状況になっていることを目の前にした時に、できることは何かないのかとすぐに思いました。

災害ボランティアセンターでは、ボランティアのお出迎えをし、熱中症対策のため漁港に氷を取りに行ったり、活動終了後にはかき氷のおもてなしをするなど、ボランティアセクターの明るい雰囲気づくりに努めました。8千人余りのボランティアの方が来られ、酷暑の中での作業、頭が下がる思いでした。

その中でも社協の皆さんの頑張りはすばらしかったと思います。センターでの出会いも良かったと思います。



心に寄り添う

災害により大切なものを失った人は、深い悲しみに襲われます。そして、これまで経験したことのない豪雨により、雨が降るたびに不安になります。被災された方の生活と心の復興を目指し、9月1日から萩市生活応援センターを開所しました。

9月下旬～ 縁バック配布

10月上旬～ まごころ表札を届けよう

10月15日 第1回生活支援相談員研修会

(田万川 5名、須佐 4名配置)

訪問調査開始

11月4日 復興と感謝のイベント「五縁まつり」

第2回生活支援相談員研修会

11月8日

「笑顔と元気」の宅配便

被災者訪問で見たこと

生活支援相談員 土井 文子



生活環境も変わり、人間関係が希薄と言われる今日ですが、まだまだ地域

で、親子、友だち、近所としっかりとした絆があることに感動し、安心しました。また、たくさんのボランティアの助けに「ありがたい」という感謝の気持ちでいっぱいです。被災された方は、心痛の多い中、気丈にふるまい、自分でできることは自分でされ、前向きに生活して

られますが、やはり困りごと、不安も多々あると感じました。地域の皆さんが安心して生活するには、お互いが思いやりを持ち、支え合う地域づくりが大切だと実感しました。まだ水に対する恐怖感を持っておられる方も多くおられます。二度とこのような災害がないことを願っています。

地域の方とのふれあい

山口県立大学ぶちボラYP勇気



私たちは、豪雨災害直後に大学内で災害ボランティアの募集を知り、泥出しや清掃の活動をしました。住民の方から「ありがとう」という言葉を聞き、私たちにできることは小さなことだけれど、きつと住民の方々とっては励みになっているのだらうと実感しました。そこで、被災された方へ癒しを届

けようと、「五縁まつり」でハンドトリートメントを行い交流を深めました。その中で、被災された方の前向きな姿に感動しました。

その後も仮設住宅に何度か訪問し、ハンドトリートメントと足湯を行いました。温かな歓迎、そしてたくさんの笑顔にふれあい、私たちが逆に励まされ、楽しく過ごしました。

大学内や地域での活動を振り返ってみると、そこにはたくさんの人の優しさや笑顔、そして強さがありました。私たちは、今後も様々な活動を通して関わっていききたいと思っています。

私たちも地域の二員

田万川中3年 中村 美月

11月4日、復興と感謝のイベント「五縁まつり」が開催されました。このイベントは江崎、小川、須佐、弥富そして災害復興に参加された多



くのボランティアの方々と五つの縁を大切にしようというものです。

私たち田万川中学生も地域の一人として、地域に元気を届けたいと思います、参加しました。

当日は、ミニSLコーナー、塗り絵などを担当しました。たくさんの子どもたちや高齢者の方々と

のふれあいを通して、温かい笑顔に接することができました。

地域に元気を届けたいと参加した私たちでしたが、逆に地域の方々から元気をいただきました。

これからも地域の一人として役に立ちたいという想いを新たにしたり一日となりました。

地域を元気に

子どもも、お父さんもお母さんも、おじいちゃんもおばちゃんも、地域を思う気持ちは誰もが持っています。少しでも早く地域が元気になるように、自分ができることを探しています。

2月1日 生活応援センターだより「縁」発行

3月上旬 新しき生活の応援隊「引越越しボランティア」

4月上旬 地域に元気を！「家庭菜園復興ボランティア」

地域に根ざしたお店

小川1区 内田 清司

豪雨災害で自宅と併設の鮮魚店が水害に遭い、店舗の冷蔵庫など全滅。一時は鮮魚店の廃業まで考える日々でした。

小川地区は過疎高齢化が進み、人口も減少しています。また、消費者

は、時代とともに移り変わっています。自家用車で大型スーパーなどに行き、魚類を含めた食材や日常生活用品を購入されたり、一人暮らし高齢者の方々は歩行が難しく、来店で



きない状況など個人鮮魚店の経営は前途多難です。

私の鮮魚店は、母親が立ち上げて半世紀を迎えます。これまで地域の方々に支えられて、どうにか鮮魚店をやってきました。

今回、再生のきっかけは、全国から駆け付けてくれた災害ボランティアの応援、地域の方々へのこれまでの感謝と支える立場に鮮魚店の役割があると思います、お店を再稼働しました。私たちの地域で、復興への元気を発信できればと思います。

この場所から...

須佐中津 林 淳子

昨年の豪雨災害から一年が経とうとしています。今まで生きてきた中



であればどの被害は初めてで、あの場所に住むことも、まして総合衣料店はやしを再開することもあきらめ、即解体、閉店を決めました。

しかし、多くの方がボランティアに入ってくださり、片付いていくにしたがって気持ちが揺れ始めました。ここで店をすることで、地域と繋がっていただける、私の故郷須佐を元気にできるのでは、と...

あと何年できるかわかりませんが、この場所でもう少し頑張っています。

地域と共に生きる施設

特別養護老人ホーム阿北苑

6月15日、地域の皆さまに感謝を込めて「阿北苑祭」を行いました。好天に恵まれ、昨年の水害から復旧し元を取り戻した施設へ、多くの方々にお越しいただきました。

ご家族や地域の方が出演された演芸、模擬出店、くじ引き、餅まきと大いに盛り上がり、阿北苑の職員は心から勇気づけられました。これからも地域と共に生きる施設として、頑張つてまいります。



仮設住宅の思い出

育英小2年 波田 悠希



ぼくが1年生だったとき、花火の日に大雨がふりました。すんでいたいえの中に、雨がいつぱい入つてすめなくなりました。

だから青ばだいのかせつじゅうたくにすむことになりました。子どもはぼくだけでした。

かせつじゅうたくでは、良い思い出やお友だちがいっぱいできました。

だけど、ひっこしすることになり、友だちとわかれることがざんねんでした。本当はもう少し良かったです。おわかれするときは、みんなに「今までありがとうございました」と、言いたかったです。

一ばんわすれられないのは、たこやきパーティーです。すごく楽しくて、おいしかったです。また、みんなでやりたいと思いました。

かせつじゅうたくのおじいちゃん、おばあちゃん、おかしをくれたり、サッカーをしてくれたりして、ありがとうございました。ぼくは、大きくなつてもわすれません。

明日に向かって共に前へ

たくさんのご支援により、少しずつ地域は復興へと向かっています。でも、被災された方の思いはまだまだ複雑です。

しかし、小さくても一歩ずつ歩むことが大切。ひとりの力には限界がありますが、地域での日ごろからの付き合い「縁」を大切にし、共に前を向き歩んでいきます。

5月中旬～ 「被災のすすめ」
6月13日 災害から学ぶ
6月下旬～ ひまわりのバトン
7月下旬～ 「ご縁ちゃん」マスコットキャラクターの募集

私の支え

元小川15区 原 彩夏

あの日、職場から家に帰って自分の家を見た時衝撃を受け、どうしようもできなくて呆然としました。

ひとり残っていた母、近所の人、昔から顔なじみの人、みんなが無事でなによりだったと思います。

人間は、「やるしかない」という状況になると、人は動ける生き物

になると知りました。「大変」「苦しい」「辛い」と感じるのも生きていくからこそその感情だと思い、自分にできることをやりました。

そんな自分を支え、笑顔くれたのは遠く離れた友人の存在でした。「信頼のおける友人だからこそ」の言葉をもらい、あの時の自分も今の自分もあると思います。苦しみも感謝も忘れられない出来事です。

涙を超えて

須佐横屋丁 青木 智子



土石流があつ
という間に我が
家を飲み込み、
家財の倒れる
音、窓ガラスが

割れ、家の中をぐるぐる浮いて廻る
家具で地獄のような光景でした。

消防団員の誘導で公民館に避難
し、翌日、自宅に帰り現状を目の当
たりにして呆然となり、ただ涙、涙
でした。

社協からボランティア、地域の方
や友人そして親戚の手助けがありま
した。多くのボランティアの手助け
をいただいたおかげで、家の中が片
付きました。

言葉で聞くボランティアではな
く、被災者の身と心になり、汗、土
まみれになりながらも、一生懸命笑
顔で接し、私たちを元気づけてくだ
さいました。心の支えとなり、本当
にありがとうございました。

現在は、少しずつ以前の生活に戻
りつつありますが、今から国県市の
復興事業が始まり、災害以前の生活
に戻るまでには、日数がかかると思
います。

これからも地域やボランティアの
皆さんのご縁を大切に、明日に向か

つて頑張っていきます。

おもてなしの心で

キヌヤ須佐店 明山 智子



昨年の豪雨災害で被災された皆様
へ心よりお見舞いを申し上げます。
7月28日以降、赤いベスト（災害

ボランティアセンター）を着用され
たボランティアの方、地域住民の
方々、安否を心配され、お見舞いに
来られた方など、全国各地からたく
さんのお客様が買い物に来られま
した。連日の猛暑の中、来店される
お客様へ飲料やお弁当、アイスクリ
ームなど欠品でご迷惑をかけないよ
う、全従業員で欠品防止に努めまし
た。完璧にお客様のご要望にお応え
できたかどうか分かりませんが、最
善を尽くさせていただきました。

肉体的、精神的に限界ぎりぎりの
大変な中、被災されたお客様から
「キヌヤがあつて本当に良かった」
と言っていたこと、大変あり
がたく、今でも鮮明に覚えています。
今後、皆様に健康、幸せな生活の
お手伝いをさせていただける店づく
りに努めてまいります。

地域から発信

小川4区 安達 千仁

4月から河川や山崩れ田畑などの
本格的な復旧工事が始まりました
が、梅雨に入り不安の声が聞こえま
す。

しかし、田植えや畑仕事をされて
いる方、子どもたちの笑い声や遊ぶ
姿を目にすると、元気を取り戻し、
一步一步元の生活に戻って来ている

ように感じています。

地域で生活する次世代の我々は、
これから地域の担い手として、この
災害を風化させないためにも、何を
行動するか、あるいは何を発信して
いくか、考える時期だと思っています。

例えば、拠点施設を活用し、高齢
者と子どもが交流することで大人も
集まり、自然にコミュニティが生ま
れます。この仲間づくりを大切に地
域の元気を発信したいと考えていま
す。

地域の助け合いや人と人との「絆」
の大切さを改めて実感し、子どもた
ちに伝えていきたいと感じていま
す。



善意銀行 ありがとうございます

香典返し・玉串料返し・花料返し

寄付者の承認を得たもののみを掲載しています。
※平成26年5月1日～6月30日受付分（敬称略）

氏名	住所	備考	金額
萩			
藤山 周亮	中小畑の4	母／包子	金一封
松原 満春	大島赤穂瀬前	母／サク	金一封
小池 松利	越ヶ浜5区	父／亀太郎	金一封
伊藤 敬次	江向1区の4	母／アヤ子	金一封
匿名			10,000円
藤山 幸衛	鶴江2区の1	弟／幸男	金一封
石津 清一	江向3区の1	母／正子	金一封
田中 勇	玉江浦2区の2	妻／百代	金一封
土井 良男	中小畑の2	父／吉五郎	金一封
三島 敬史	新川西の2	母／悦子	金一封
清谷 和子	無田ヶ原の1	夫／武人	100,000円
勝俣 宣子	浜崎4区の1	夫／縫之助	金一封
木村ヨシエ	三見石丸	夫／初幸	金一封
野原 清子	山田2区	夫／武夫	金一封
中村 国男	三見浦4	父／好祐	金一封
藤村 哲也	中ノ倉の3	父／榮	金一封
三村 勝己	倉江の2	母／マツ子	金一封
小野村寿美夫	後小畑の1	父／市郎	150,000円
上田 裕子	土原3区の2	夫／秀夫	金一封
白井 照和	倉江の3	母／晴子	金一封
大橋 玉乃	見島5区	夫／俊雄	金一封
末武 修	金谷の1	父／三重	金一封
上領 勝	玉江浦2区の2	弟／弟二	金一封
寺尾 明美	浜崎新町の1区	夫／利夫	金一封
横山 榮治	三見手水川	母／千恵子	金一封
池部 裕恵	無田ヶ原口の1	母／大草ヒデ子	金一封
神野ツヤ子	江向1区の4	夫／洋一	金一封
金子 清美	三見浦2	母／キヨ子	金一封
田村 忠士	無田ヶ原の3	母／テル子	金一封
河村 善英	椿町の2	夫／愼一郎	金一封
匿名	大井港浜の1	父／初美	金一封
山中 克巳	土原1区の2	妻／美奈子	金一封
玉村 信一	三見中山	父／登	金一封
落合 厚之	中津江の1	妻／八重子	金一封
末國 英章	平安古東区の2	父／享三	金一封
柳井貴美江	堀内1区の1	夫／和彦	金一封
岡崎 正和	松本市の1	父／正	金一封
池部 龍夫	大島沖手	父／登	金一封
岡村 竜也	大島猪之坂	妹／満代	金一封
金子 利光	見島3区	妻／喜美枝	金一封
濱野千鶴子	見島8区	母／田鶴子	金一封

氏名	住所	備考	金額
赤崎 晋也	大阪市淀川区	父／公介	金一封
松永 道伸	見島11区	母／恒代	金一封
川 上			
神崎 智子	三徳	夫／道信	金一封
山根 弘	川上山田	妻／宥子	50,000円
田 万 川			
上濱 吉信	戎一	父／明弘	金一封
源田 和夫	小川23区	母／ヨシ子	金一封
吉野 巖	弁天	妻／ウタ子	金一封
井上 健助	小川17区	父／健次	金一封
波田 忠	防府市田島	母／八重子	金一封
野稻タマヨ	小川15区	夫／定	金一封
松本 文明	益田市栄町	母／田村ミサヲ	金一封
坂本 昭	尾浦	妻／ムツ代	金一封
む つ み			
原 賢一	鱒谷	母／愛子	金一封
中原 貞己	神奈川県横浜市	母／孝子	金一封
藤田 征範	岸高	母／シヅヨ	金一封
山根富美夫	毛木山	妻／球世	金一封
須 佐			
上田 幸子	上三原	夫／武利	金一封
藤田 節義	弥富6区	母／イサ子	金一封
田島 稔	弥富11区	父／周次	金一封
茂刈 晋一	横屋丁	母／ルキコ	金一封
中村 信美	入江	父／満信	金一封
末岡 栄二	浦西	母／八重子	金一封
寺本 常子	弥富12区	夫／利秋	金一封
堀 康忠	弥富3区	母／和子	金一封
伊藤 一男	須佐中畑	弟／次男	金一封
旭			
山本 恒光	長瀬	弟／繁樹	金一封
竹本 隆一	大下	母／澄子	金一封
土山 亀代	長瀬	夫／登	金一封
金子 功	下横瀬	父／和行	金一封
新屋 幸男	矢代	父／壽和	金一封
福 栄			
山中沙代子	紫福長尾	夫／茂樹	金一封
岸田トシエ	黒川	夫／誠一	金一封
金田 正枝	榎屋	夫／正熙	金一封
中村スミヨ	栗原	夫／公夫	金一封
佐々木ミサ子	京場	母／ミサヲ	金一封
阿武 輝実	仁保谷	母／榮子	金一封



あなただけの
しあわせに...
第9回

しあわせ写真コンテスト

このコンテストは、写真を通して世代間交流、仲間づくり
や生きがいづくりに取り組むとともに、市民の皆さんの積極
的な地域の福祉活動への参加を推進したい。

また、いつまでも市民の皆さんの「しあわせな姿」を残
し、語り継いでいこうとするものです。



—— 2014 ——

応募期間

作品募集 8/1~9/13
(金) (土) 当日消印有効

しあわせ写真コンテスト

— 2014 —

応募期間

作品募集 8/1~9/13
(金) (土) 当日消印有効

テーマ	日常生活の中にある笑顔、ふれあい、助け合い、交流など、しあわせ(福祉)を題材として撮影したもの
応募資格	萩市内にお住まいの方または通勤、通学されている方
応募規格	◆ ワイド4つ切版、4つ切版、A4版(カラー、白黒、タテ、ヨコ位置は自由) ※ 電子メールでの応募の場合、写真はデータ添付、JPEG形式、2MB以内
応募先	◆ カメラのアート商会、カメラのキタムラ萩店 ◆ 萩市社会福祉協議会本所・事務所
審査・発表	主催者及び主催者が依頼する審査員による審査会を設けて審査し、その結果を入賞者に通知します。
表彰	◆ 入賞作品(15点程度)を選び、賞状及び副賞を授与します。 ◆ 第10回萩市社会福祉大会(10月25日)で表彰します。

応募要領

- ◆ 応募料は無料です。
- ◆ 3年以内に撮影した自作品で未発表のものに限ります。(枚数制限なし)
- ◆ 右の応募票の全項目に記入し作品の裏にセロハンテープで1ヶ所貼付してください。
- ◆ 応募作品は返却しません。
- ◆ 作品の著作権は主催者に帰属するものとし、展示するほか情報誌等に活用させていただきます。
- ◆ 入賞作品はネガ、データ等の提出をお願いします。
- ◆ 肖像権侵害等については応募者の責任で対応していただきます。

第9回しあわせ写真コンテスト応募票

フリガナ		年 齢
撮影者氏名		歳
ご住所	〒 ー	
連絡先 T E L	() ー	
撮影年月日	平成 年 月 日	
画 題		
メッセージ		

●主催・問合せ先

社会福祉法人 萩市社会福祉協議会

〒758-0041 萩市大字江向356-3

TEL (0838) 22-2289 FAX (0838) 22-2026

E-mail: anshin@hagi-shakyo.or.jp

●後援／萩市・萩市教育委員会

●協賛／カメラのアート商会・カメラのキタムラ萩店

一般寄付

氏名	住所	備考	金額
萩 33歳年祝い一同 川上	大島赤穂瀬先	一膳寄付	金一封
恵本ヒサヨ	三徳	見舞い返し	金一封
工野 照子	笹尾	見舞い返し	金一封

氏名	住所	備考	金額
むつみ 大光寺はたるまつり実行委員会			金一封
須佐 昭和8年4月育英小学校入学児童一同			30,976円

(香典返し・一般寄付合計 88件4,123,976円)

物品寄付

物品名	氏名	住所
須佐 座布団 10枚	匿名	
ハガキ 73枚	匿名	
皿40枚 コップ30個	ローソン萩川島店	川島3区の1

物品名	氏名	住所
旭 電気毛布	藤井 美明	長小野
米30kg	匿名	

善意銀行は、地域福祉活動推進の貴重な財源となっています。どうか協力ください。

前号6ページに、次のとおり誤りがありましたので、お詫び申し上げ、訂正いたします。

(正) 寄付者 大賀 敏男様 本町中 (誤) 青葉台

“ご縁ちゃん”マスコットキャラクター募集

昨年の萩市東部集中豪雨災害により、被災した地域とボランティアの方をつなぐ「ご縁ちゃん」のマスコットキャラクターデザインを募集します。

●募集資格 プロアマ、地域内外問わず

●募集期間 7月20日～8月20日

●募集規定 作品は正面向きで全身のデザイン
カラー仕上げ
作画の方法は自由
作品は未発表でオリジナルのもの
応募は一人1点
用紙は本所及び事務所にある用紙か、任意のA4白用紙またはホームページからダウンロードしてください。

●留意事項 作品は返却しません。
作品のデザイン、色彩、愛称などには必要に応じて変更、修正する場合があります。
作品の一切の権利は萩市社会福祉協議会に帰属します。
商品登録、商品化に関する対価は、無償とします。

作品について第三者から権利侵害などの損害賠償が提起された場合、萩市社会福祉協議会は一切責任を負いません。

●応募方法 応募用紙に必要事項を記入のうえ、作品と合わせて郵送、持参、Eメールのいずれかで応募ください。

●応募先 萩市社会福祉協議会 本所・事務所
〒758-0041 萩市江向356-3
TEL (0838) 22-2289
Eメール: anshin@hagi-shakyo.or.jp

●問合せ先 萩市社会福祉協議会 本所・事務所

編集室

7月28日は「萩市民防災の日」。酷暑の中、家屋内の泥だしや片付けをはじめ、萩市災害ボランティアセンターの運営に携わったボランティアの皆さんに対して、萩市長から災害ボランティア功労者表彰が贈られ、社協が代表して表彰状をいただきました。

ボランティアの皆さんから、作業を終えセンターに帰られた時に「疲れた」という言葉を一切聞くことはありませんでした。被災された皆さんの心情に寄り添い、元気を与えてくださり、頭が下がる思いでした。そして、地域で被災されていない皆さんにも、運営スタッフとして、道案内、道具の運搬や片付け、おしぼりやうがい液を渡すなど、小学生から高齢者の方までおもてなしの心で接していただき、心強く感じました。

むつみ地域を災害ボランティアセンターの対象としませんでした。しかし、被災された世帯をむつみ総合事務所の職員と一緒に調査し、中学生にも応援を頼み、地域の皆さんで家屋内の泥だしや片付けを行いました。

萩市の東部地域でのボランティア活動は、「困った時は、お互い様」という互助の精神があったことを一市民として誇りに感じています。また、被災された皆さんとボランティアの皆さんとの間のほかに、いろいろなところでご縁があり、生かされていることを実感しました。

これからは、いつ、どこで起こるか分からない災害に備えて、「減災のすすめ」を地域の皆さんと一緒に考えていきたいものです。

(萩市災害ボランティアセンター長 兼重)

このたびの表紙は、田万川、むつみ、須佐の皆さんの素敵な笑顔です。

この笑顔に支えられながら、もっと笑顔に出会えるよう社協は地域と共に歩んでいきます。



萩の皆さんへ

皆さん、お元気ですか？

私は、3・11から日本各地の災害支援の活動に係り、たくさんの方を見て、災害から多くのことを教えてもらっています。災害から学んだことのひとつは、災害が起きたとき「地域の性格が大きく表れる」ということです。雪深い地域の人は忍耐強く、漁師町の人は負けん気が強く、山間部の人は集落の団結力があつたりと、良くも悪くも各地域によって異なる性格があり、復興にも「地域の個性」を感じます。

昨年の夏、約1か月程の短い間でしたが、萩市の災害ボランティアセンターで感じた雰囲気は本当に温かいものでした。民生委員の方々をはじめ、夏休みの学生や地域の方が大勢参加して、運営をサポートしている姿が特徴的なアットホームな災害ボランティアセンターでした。行政の方も現場に出て、連日の猛暑の中、朝から遅くまで地域の方とともに汗を流し、瓦礫や土砂出しなどきつい作業とともに行っている姿が印象的でした。「やれる人がやれることをやる」姿がそこにはあり、萩市における「地域の強さ」を感じました。

毎日のように山口市内から両親を連れて復旧作業に来る娘さん、地域のためにいち早くお店を再開させようと、自宅より優先して店の修理を行った魚屋さん、子どもたちに生々しい被害の様子を見せまいと避難所生活をしていたお母さん、全国の蔵元が応援に駆け付けた澄川酒造さんなど、様々な問題を抱えながらも力強く復旧活動を行う姿に、私も力をもらいました。

起きて欲しくない災害ですが、起きてしまった今は、逆転の発想で「災害があつたから気付いたあつたこと」、「災害があつたからこそ一段と地域が力強くなった」、「災害があつたからこそ出会いがあつた」と角度を変えて「ピンチをチャンス」に変えてみていいのかもかもしれません。

いつも心に留めていることのひとつは、人を元気にしたいのなら、まずは自分が元気にならなくてはいけないということ。これからも、自分のためにも周りの方のためにも地域のために笑顔で前を向いて歩いてください。頑張り過ぎず、一人ひとりのペースで、一步步復興の道を歩んで欲しいと思います。

日本各地の災害支援でお世話になった地域は、私にとってちょっとした田舎のようなものです。もちろん、萩市にもちよくちよく帰りたいと思います。大好きな萩を、これからも遠くから近からずの距離で見守り、応援していきたいと思っています。

災害NGO結 前原 土武

災害NGO 結 ~Yui~ 熊本県阿蘇市

とむ
災害復旧・復興支援コーディネーター 代表 前原 土武

沖縄県出身 1978年生まれ 職歴：美容師、旅人（スノーモービルガイド・ラフティングガイド）、添乗員